

41357

教科書文庫

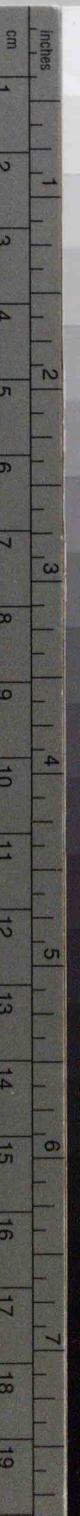
4
810
31-1918
25000
32327

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



尋常小學國語讀本 卷四 文部省

T1A4
1G8
0-73

教科
31-
25000

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

教科書文庫

4

810

31-1918

2500032327



文部省
國語讀本
卷四

広島大学図書

2500032327



登録番号

32327

分類
375.9
M

もくろく

- | | |
|---------------|---------------|
| 一 お祭 | 一 お祭 |
| 二 柿 | 二 柿 |
| 三 十月三十一日 | 三 十月三十一日 |
| 四 麦まき | 四 麦まき |
| 五 白ウサギ | 五 白ウサギ |
| 六 をぢさん の うち | 六 をぢさん の うち |
| 七 私どもの 町 | 七 私どもの 町 |
| 八 山びこ | 八 山びこ |
| 九 フクロフ | 九 フクロフ |
| 十 日と風 | 十 日と風 |
| 十一 すすはき | 十一 すすはき |
| 十二 かるた取 | 十二 かるた取 |
| 十四 | 十四 |
| 十五 しひの木 とかしのみ | 十五 しひの木 とかしのみ |
| 十六 大工小屋 | 十六 大工小屋 |
| 十七 扇のまと | 十七 扇のまと |
| 十八 山がら | 十八 山がら |
| 十九 ナゾ | 十九 ナゾ |
| 二十 一本杉 | 二十 一本杉 |
| 二十一 汽車のたび | 二十一 汽車のたび |
| 二十二 ヒナマツリ | 二十二 ヒナマツリ |
| 二十三 春が來た | 二十三 春が來た |
| 二十四 曽我兄弟 | 二十四 曽我兄弟 |
| 四十六 | 四十六 |

一 お祭

うちがみさまの森モリで、あさからた
いこのおとキホがします。今日はお祭
です。大きな字シルを書いたのぼりが
すみきつた空タマに立つてゐます。
おひるすぎに、をばさんタマのうちから
おとよさんと太郎さんタマが來ました
ので、三人でお宮ミヤへまゐりました。

森

立

宮

店

鳥のあたりは道のりやうがはに
 いろいろな店がならんでゐます。おま
 ちややにはらつぱやかたなやひが
 うきなどがならべてあります。ほほづ
 きやふうせん玉を賣る店も出て
 ゐます。又あめややくわしやはでは
 やし立てておきやくをよんでも
 ります。ちやうど人の出きかりでお宮のす



すがひつきりなしになつてゐます。私ども
 してをがみました。お宮のうらではす
 まふがはじまつてゐて、わあわあとはや
 すこゑがきこえます。

音

あちら こちら に 子ども の ならす ら
つは や ふえ の 音 も して、 たいそ
にぎやか です。

今年

今年 は 田 が よく 出來 た ので、 ば
ん には その おいはひ の 花火 が 上
る さう です。

柿

私の うち には 柿 の 木 が 五本 あ

二 柿

生ります。しぶ柿 が 三本、 あま柿 が 二本
で、 その 中 に 私 の 木 が 一本 あ
ります。 あま柿 です。 これは 私 が 生
れた 年、 おぢいさん が 私 の ぶん に
つぎ木 を して 下さつた のだ さう
です。

おぢいさん が この 柿 の 木 を つい
で いらつしやる 時、 下男 の 太七 が わ

下男

ニ 柿

五

ニ 柿

四

國 四

らひ ながら、
「ごいんきよさま、そのお年でつぎ木
をなさるのですか。
といつたさうです。その時おぢいさ
んは

孫へのこしてやるのさ。
とおつしやつたといふことです。
今年は柿のあたり年で、どの木



にもよくみが
なりました。私の
木も枝がを
れるほどなつて
ゐます。きのふ
つ取つてみましたら、もう黒くごまを
ふいてゐました。
この二十五日はおぢいさんのがい日

ですから、たくさん取つてそなへるつもりです。

三 十月三十一日

長節式 キノフハ十月三十一日デ天長節ノ

オイハヒ日デシタ。學校ノ式ガスン
デカラトモダチトムカフノ山へ上リマシタ。

村ノ方ヲ見ルトドノ家ニモ

谷コクキガ出シテアリマシタ。谷ソコノ

一ケンヤニモ川ヲ下ツテ行ク小サ

ナ舟ニモコクキガ出シテアリマシ

タ。

國中キノフハ日本國中ノ人ガミンナ

天皇ヘイカノバンザイヲイハツタノ
デス。

四 麦まき

黄

なら やくぬぎ の
はは 黄に そまり、
廣い たんぼ に
北風 あれ。

朝

風に 吹かれて、
なま土 ふんで、
今日 も 朝から
せい 出す おや子。

おやは かへして、
子は くれうつて、

廣い たんぼの

麦まき すます。

「やつと すんだ。と

見上げる 空に、

あすも 天氣か

夕日が 赤い。

麥

氣

五 白ウサギ

島ニヰキタ白ウサギガムカフノ大
キナヲカヘ行ツテ見タイトオモツ
テ海ヲワタルクフウヲシテヰマ
シタアル日ハマベヘ出テ見ルト、
ワニザメガ居マシタカラ、

「オマヘノナカマトワタシノナカ
マトドツチガ多イカクラベテミ」

多居

ヨウ。

トイヒマシタ。ワニザメハ

ソレハオモ白カラウ。

トイツテ、スグニナカマヲ大ゼイツ

レテ來マシタ。白ウサギハコレヲ見

テナルホド、オマヘノナカマハズキブ
ン多イ。ワタシタチノ方ガ少イ

少

力モシレナイ。オマヘ
タチノセ中ノ上ヲ
アルイテ、カゾヘテミル
カラ、ムカフノヲカマ
デナランデミヨ。

トイヒマシタ。

ワニザメハ白ウサギノ
イフ通りニナラビマシ

タ。白ウサギハ一ツニ
ツトカゾヘテ、ワタツテ
行キマシタガ、イマ一足
デヲカヘ上ラウトイ
フトコロデ
「オマヘタチハウマク
ワタシニダマサレタナ。ワタシハコ
ノヲカヘ來タカツタノダ。



毛

トイツテ ワラヒマシタ。ワニザメ ハソ
 レヲ キク ト、タイゾウ オコツテ、一バン
 シマヒ ニ 居タノガ、白ウサギノ毛
 ヲミンナムシリ取ツテ シマヒマシタ。
 白ウサギハ イタクテ タマリマセン カラ
 ハマベニ 立ツテ、ナイテ 居マシタ。ソコ
 ヘ 神様 ガタガ オ通リガカリニナツテ
 「ナゼ ナクノカ。」

神様

ト オタヅネニ ナリマシタ。ワケヲ申

シ上ゲマスト、

しなの太郎

ソレナラ 海ノ水ヲアビテ、ネテ

居ルガヨイ。

トオヲシヘニ ナリマシタ。


國四三

白ウサギハ スグ 海ノ水ヲアビマ

シタガ、前ヨリ モカヘツテ イタクナ

ツテ、クルシガツテ 居マシタ。

ソコへ大國王ノ神ガオ出デニナリ
マシタ。コノ神様ハサキホドオ通り
ニナツタ神様ガタノ弟ノ方デ
ス。兄様ガタノオトモヲシテフク
ロヲカツイデイラツシヤツタノデオ
オクレニナツタノデス。

コノ神様モ、

「ナゼナクノカ。」



トオタヅネニナリマシタ。白ウサギハ
目ヲコスツテ又ソノワケヲ申シ
上ゲマシタ。スルト神様ハ
ソレハカハイサ
ウダ。早ク川ヘ
行ツテシホケノナ
イ水デカラダヲ
アラツテガマノホ

ヲ シイテ ソノ 上ニ コロガレ。

ト ヲシヘテ 下サイマシタ。

白ウサギ ガ ソノ 通りニ シマスト、カ
ラダ ハ スツカリ モト ノ ヤウ ニ ナ
ホリマシタ。ヨロコンデ 大國主ノ神 ノ ト
コロ ヘ オレイ ニ 行ツテ、

「オカゲサマ デ カラダ ハ コノ 通りニ
ナホリマシタ。アナタ ハ オナサケブカイ

オ方 デス カラ、後 ニハ キツト オシ
アハセ ノ ヨイ コト ガ ゴザイマス。
ト 申シ上ゲマシタ。

ソノ 後 大國主ノ神 ハ 白ウサギ ノイ
ツタ 通り、エライ オ方 ニ オナリ ニナ
リマシタ。

六 をぢさん の うち

山 一つ むかふ の 村 に をぢさん の

うちがあります。私はきのふふろしきづつみを持つて、おつかひに行きました。

をぢさんのはうちでは、には一ぱいもみがほしてあつて、足のふみばもないくらゐでした。うちの人はみんなたんぼへ出て、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物を

していらつしやいました。

おばあさんはもう耳が遠いので、大きなこゑで、

「おばあさん、今日は。」

といふと、ふりかへつて、「おう、三ちゃんか。よく來たね。といつて、ふろしきづつみをうけ取つて、とだなからうでたくりをおぼんに

一ぱい 持つて 来て 下さいました。
前の 島の 柿の 木は、はがま
つかになつて るて、二つ三つ とりのこ
して ある 柿が 赤い 玉の やうに
光つて るます。

えんさき の さざんくわに、面白が二
は 来て るて、枝から 枝へ とんで
ゐます。にはとり が 時時 もみを かき

出します。おばあさんが 「ほう ほう」とい
つて おおひになります と、にはとり
より さきに すずめが くらの やね
へ にげて 行きます。

おばあさん が

「今日 は こんなに もみが ほしてあ
る から、をぢさんも をばさんも 早
く かへります。もつと あそんで お出で」

といつておとめになりましたが、おそらくなるとおもつて、いただいたくりを持つてかへりました。

七 私どもの町

私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。町やくばも、けいさつしよも、いうびんきよくも、みんなのきらんぶが電とうに

電町

かはりました。

米屋

ごふく屋

小ま物屋

あ

ら物屋

くすり屋

さか屋

さ

かな屋

そのほか

大きな

さ

店は

いくつも電とうを

つけました。

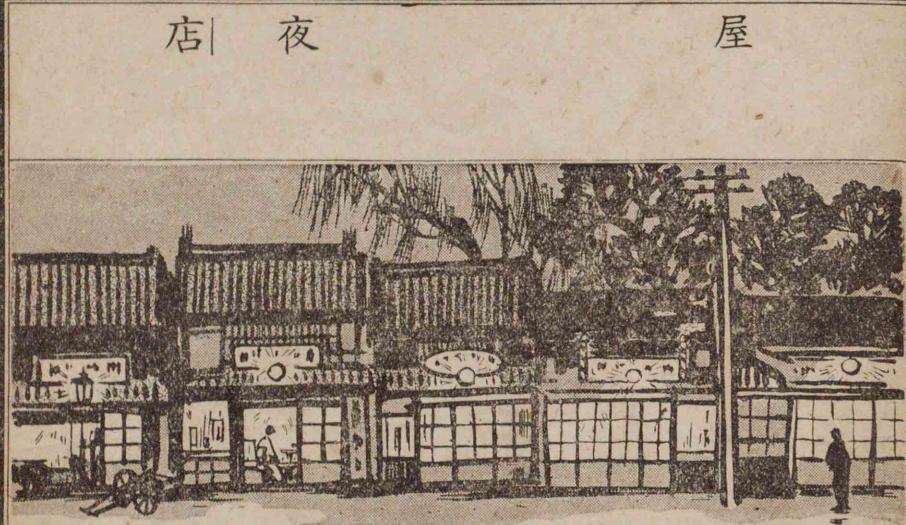
本町通

は夜も

ひるのやうで、

りはつ店

などはまぶしいほどです。



店夜

私のうちでも二つつけました。電と
うはらんぶとちがつて、へやのすみ
すみまであかるく、その上火のよ
うじんもようございます。

工場 話町

よこ町に電氣の力で米をつく
家も出来ました。電話も近い中に
私どもの町へかかるさうです。
又町はづれに大きな工場のふしん

がはじまつて居ます。もう高いえんと
つは大方出来上りました。これは大
じかけでれんぐわをやく工場です。
これが出来上るころにはてつだうが
私どもの町を通つて、工場の近く
くにていしや場が出来るさうです。
さうなつたら町はどんなにべんりに
なるでせう。

八 山びこ

正太郎 が 犬 を つれて、山道 を 通り
ました。犬 の すがた が 見えなく な
つた ので、「ほち ほち」と よびますと、向
ふ の 方 で、「ほち ほち」と 口まねを
する もの が あります。

友だち でも 居る の か と おもつて、
「おうい」と よぶ と、「おうい」と いひ、「だ」

れだと いふと、「だれだ」と 答へます。
正太郎 が おこつて、「ばか」と いひますと、
又 向ふ で、「ばか」と 口まねを します。
そこへ ほち が 来ました ので、一しょに
向ふ の 方 へ 行つて みました が、だ
れも 居ません でした。
うちへ かへつて、父に この こと を
話します と、父は

「それ は 山びこ です。だれ も 居る の
では ありません。」
と をしへました。

正「山びこ」とは 何の こと で ございま
すか。」

父「ごむまり を かべ になげつける と、は
ねかへる でせう。」

正「はい。」

父「人の こゑ も 山の中 では、かべ に

あたつた ごむまり の やう に、かへつて
來ること が あります。それが 山びこ
です。」

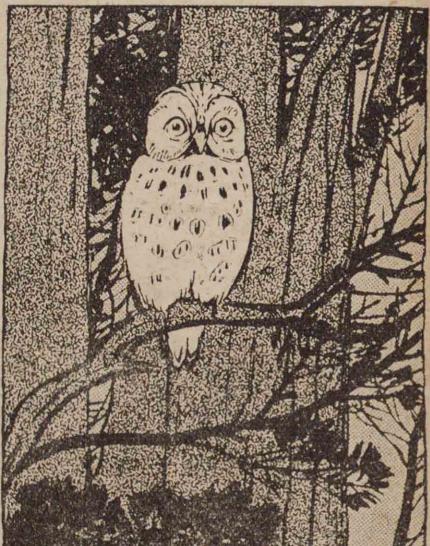
こちら で やさしく いへば、向ふ でも
やさしく 答へ、おこつて いへば、おこつて
答へる の です。向ふ で 「ばか」とい
つた の も、お前 が 先に 「ばか」とい

いつた から です。

九 フクロフ

フクロフ ハ オモ白イ カツカウ ノ 鳥 デ
ス。フクレタ カラダ マンマルナ 目。カホ
ハネコ ノ ヤウ デ、其ノ 上 ネズミ ヲ
トツテ クフ ノデ、ネコ鳥 トイフ トコ
ロ モ アリマス。

夜ニナルト、ホカノ鳥ハ大ガイ



目ガ見エナクナル
ノニ、此ノ鳥ハ見

エルノデ、ホカノ鳥

ヲイデメタリ、ツカミ

コロシテエニシタリシテアバレマハ

リマス。其ノ中ニ夜ガ明ケルト、目

ガ見エナクナルノデ、森ヤ林ノヒ

クイ木ノ枝ニトマツテボンヤリト

所鳥

シテ 居ル コト ガ アリマス。
 スルト ホカ ノ 鳥 ガ 見ツケテ ア ニ
 クイ ヤツ ガ 居ル。ト イハナイ バカリ
 ニ、ヨツテ タカツテ イデメカヘシマス。
 鳥 ハ 大キナ コエ デ ワルロ ヲ イヒ、
 太イ クチバシ デ ツツキマス。モズ ハ 小サイ
 ガ マケヌ氣 ノ 鳥 デス カラ 高イ 所
 カラ トンデ 來ガケ ニ フクロフノ カホ

ヲ ケツテ、「キイ キイ」ト カチドキヲア
 ゲマス。スズメハ ヨワイ 鳥 デス ガ、ソバ
 ヘヨツテ、ヲドツタリ サヘヅツタリ シテ バ
 カニ シマス。ソレ デモ フクロフ ハシ
 方 ガ ナイ ノデ、大キナ 目 ヲ 見ハツテ
 キヨトキヨトシテ 居ル バカリ デス。
 フクロフ ノ 鳴キゴエ ハ 所 ニ ヨツテ
 イロイロ ニ イヒマス。フクロフ ガ 鳴クト、

其ノ 明クル 日ハ 天氣ガヨイカラ、
ノリツケホウセト鳴クノダトイフ
所モアリマス。

十日と風

ある時、日と風が力くらべをしました。たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、先づ風からはじめました。

先勝

風は「何一まくりにして見せよう」とはげしく吹立てました。するとたび人は、風が吹けば吹くほど、ぐわいたうをしつかりとからだにくつつけました。こんどは日の番になりました。日は雲のあひだからやさしいかほを出して、あたたかな光をおくりました。たび人はだんだんよい心持になつて、

番

心

しまひにはぐわいたうをぬぎました。そ
こで風の負になりました。

十一 すすはき

昨日

昨日はうちのすすはきでした。おか
あさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、
着物の上にちりよけを着て、下女
や手つだひのものにおさしづをし
ておはたらきになりました。

女

負

外

一番先にしゃうじやからかみが外
へ出されました。かけ物やがくも
はづされました。にはへいたやむしろ
をしいて、そこへ火ばちや机や本箱
やいろいろな物がはこび出されました。
たんすをうごかすと、其のうしろか
ら物さしと花子のお手玉が出ま
した。つづらや長持も出されました。

戸

十一 すすはき

四十二

後 僕

戸だな や 戸だな の 中 の 物 も み
んな 外 へ 出されました。
だい所 で いろいろな 物 を のける と、
子ねずみ が 一びき とび出しました。 下女
が びつくりして、「きやつ」と いつた ので、
後 で みんな に わらはれました。
ぱたぱた、ぱたぱた、いよいよ さうぢが は
じまりました。 僕 も はたき を 持つて

吉

手つだひました。 天じやう を はらふ、たた
みを たたく、ひきしうら のくものす
を 取る、勝手 の すす を はらふ、まる^二
で いくさ の やう でした。
手つだひ の 今吉 が おどけて、はうきを
大なぎなた の やう に 持つて、べんけい
の まね を しました。 僕 は 牛わかまる
になつて、はねまはつて たたかひましたら、

十一 すすはき

四十三

自分



十一 すすはき

四十四

おかあさん に しかられ
ました。花子 は わこを
だいて うろうろして 居
ました ので、
「花子 も 自分 の お
もちや だけ ちやんと
おかたづけ なき。」
と いはれました。

「此のごろ は 大きうぢ
が やかましく なつた
から、すすはき は 大
きに らく に なりま
した。
と 今吉 が いひました
が、それ でも ふきさう
ぢ が すんで、すつかり

十一 すすはき

四十五



いろいろな物をもとの所へなほしたら、夕方近くなりました。

おとうさんがおかへりになつた時には、家の内も外もきれいになつて居ましたので、みんながほめられました。

十二 かるた取

友一のうちでかるた取がはじまつて居ます。よみ手はおぢいさんで、取手は

みよ子 ちよ子 國太郎 音二郎の四人と、友一と友一のあねの道子です。今ちらしで取つて居ます。

「花 より だんご。」

みよ子「はい、ありました。」

「ちりつもつて 山となる。」

國太郎「はい。」

「ねんにはねんを入れ。」

ちよ子「はい。」

「おににかなぼう。」

童郎「はい、とりました。」

「ゆだん 大てき。」

友一「はい。」
道子「はい。」

道子「私が取つたのです。
友一「いいえ。僕が取つた
のです。」



「さう ひつぱりあつて
は いけません。まん」

中へ ふせて おき」

なさい。こんど 取つた

人 が それ も 取る こと に し ま す。

「負ける は 勝。」

さあ、つぎ の を よみます。
人 が それ も 取る こと に し ま す。

道子「はい、取りました。せん の も 私 が

僕



取ります よ。

「なきつら に はち。」

道子「ばい。」

これ から 友一 は だんだん あせり出しました。みんな も しまひ には むちゅうになつて 取りました。

一ど すみました。道子 が 十二まい、みよ子 が 十まい、國太郎 が 九まい、ちよ子

が 八まい、音二郎 が 六まい、友一 は なつた 二まい でした。

それ から 又 二くみ に 分れて、何べん も 取つて あそびました。

いろは にほへと ちりぬるを
わかよ たれ そつねならむう
ゐのおく やまけふ こえてあ
さきゆめ みしゑひもせず

十三 烂はがき

東京

年



勝太郎、東京のをぢ
さんからお前の所
へ 烂はがきが來ま
した。よんとごらん。
「はい。」

新年おめでたう。此
のあひだひかうせん

が 東京の空をとびました。これは

其の 烂はがきです。

十四 お話二つ

宿

東京の宿屋で、山國のものと、島
國のものがおちあひました。山國の

もののが

曰は山から出て、山へはいる。

といへば、島國のものが

國

山
白
山
國

思追

思ふ

十五 しひの木と
ぞんぶんはびこつた



とらをしばつて見せよ。
「しばつてお目にか
けます。どうぞここへ追出しだ下さいま」

十五 しひの木と
かしのみ

根聞

「いや、海から出て、海へはいる。
といつてあらそひます。そこへ宿屋の
ていしゆが来て、

「へええ、日は屋根から出て、屋根へ
はいるものではございませんか。」

「お前はたいそうとんちがあると
聞いた。此のからかみにかけてある

山のふもとのしひの木は、根もとへ草もよせつけぬ。

山の中からころげ出て、人にふまれたかしのみがしひを見上げてかういつた。

今に見てゐろ、僕だつて、

見上げるほどの大木になつて見せずにおくものか。

何百年かたつた後、山のふもとの大木はあのしひの木か、かしの木か。

十六 大工小屋

私ノウチデハ此ノゴロ土ザウノ

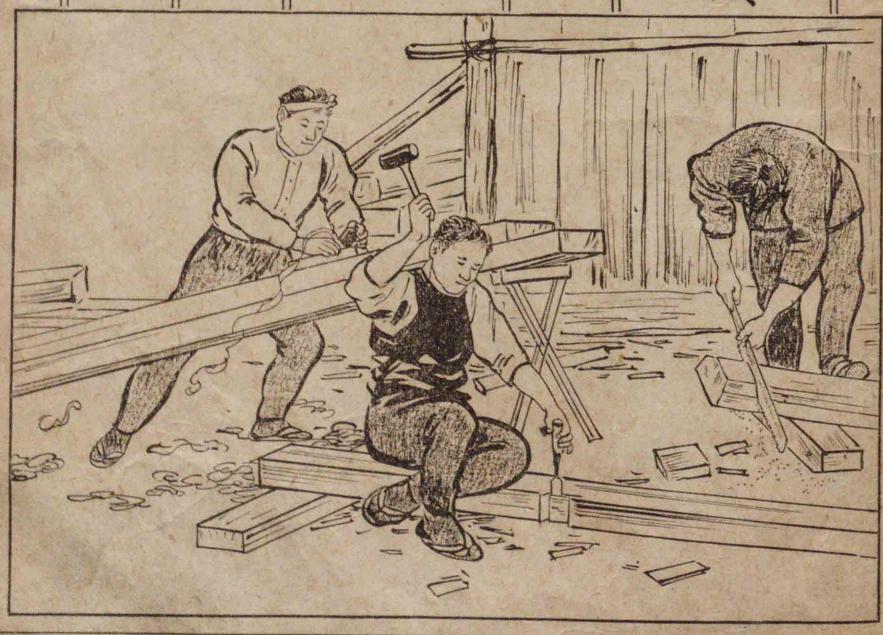
フシン ガ ハジマツテ 居マス。ニハニ 大
工小屋 ヲ タテテ、大ゼイ ノ 大工 サン
ガ 毎日 其ノ 中 デ 仕事 ヲ シテ 居マ
ス。

ドンナ サムイ 日 デモ、大工 サン ハ ミ
ンナ シルシバンテン ヲ ヌイデ キセイ
ヨク ハタライテ 居マス。

ノコギリ デ 木 ヲ キル モノ モ アリ、

板
ノミ デ アナ ヲ ホ
ル モノ モ アリ、
カンナ デ 板 ヲ ケ
ヅル モノ モ アリ
マス。

私 ハ カンナ ヲ カ
ケテ 居ル ノ ヲ 見
ル コト ガ スキ デ



ス。ヨク キレル カンナ ガ スウツト 板
 ノ 上 ヲ 通ル ト、カンナクヅ ガ ヒト_リ
 リデニ クルリト マハツテ スベリオチマス。
 風 ガ 吹ク ト、カンナクヅ ガ 小屋中
 マツテ アルキマス。
 私 ハ 昨日 大工 サン カラ 木 ノ キ
 レ ヲ タクサン モラツテ、友ダチ トツ_二
 ミ木 ヲ シテ アソビマシタ。

十七 扇のまと

屋島 の たたかひ に、げんじ は をか
 へいけ は 海 で、向ひあつて 居ました
 時、へいけ方 から 舟 を 一そう こぎ_二
 出して 来ました。見れば へさき に 長い
 さを を 立てて、其の さを の 先 には、
 ひらいた 赤い 扇 が つけて あります
 一人 の くわんぢよ が 其の 下 に 立_二

つて、まねいて 居ます。さをの先の扇
をいよと いふのでせう。

舟はなみに ゆられて、上つたり 下つ
たりします。扇は風に吹かれて、く
るくるまはつて 居ます。いくら弓の名人
でも、これを一矢で いおとすことは、
なかなか むづかし さうです。
げんじの大しやう、よしつねは 家來

家來

弓
名人

下

に向つて、
『だれかあの扇を いおとすものは
ないか。』

とたづねました。其の時 一人の家來
がすすみ出て、

「なすのよーと申すものがござ
います。空をとんで居る鳥でも、三
羽ねらへば、二羽だけは きつとい

羽

上手

おとすほど
の上手で
ございます。

といひました。

つねは

「それをおよべ。」

と、すぐによーをよび出しました。
よーはじたいしましたが、よしつねが



ゆるしません。よーは心の中
で、もしこれをいそくなつたら、
生きては居まいとかくご
をきめて、馬にまたがつて、
海の中へのり入れました。
弓をとりなほして、向ふを見
わたすと、舟がゆれて、まと
がさだまりません。しばらく目

をつぶつて、神様にいのつてから目
をひらいて見る。と、今度は扇が少
しおちついて見えます。よ一は弓に
矢をつがへ、よくねらひをさだめて、
ひようといはなしました。

赤い扇はかなめのきはをいきら
れて、空に高くまひ上つて、ひらひらと
二つ三つまはつて、なみの上にお

ちました。

をかの方では大しやうよしつねを
はじめ、みんなが馬のくらをたた
いてよろこびました。海の方でもへ
いけ方がふなばたをたたいて、一度に
ひとつほめました。

十八 山がら

私のうちに山がらが一羽かつてあ

りました。たいそう よく なれて、私の 手
から 魚 をたべる ほど に なつて 居
ました。

それが かはい さう に、ある ばん ねず
みに 足 の ゆび をくひきられました。
どんなに か 鳴いた の でせう が、うち
の もの は 朝まで しらず に 居ました。
きず を 見て やらう と 思つて、私が

かご の 戸 を 明けます と、山がら は
とび出して、竹がき の 上 に とまつて、
それから うら の 山 へ とんで 行つて
しまひました。

これは 私 が 七つ の 年 の こと で
したが、今 でも 山がら の こゑを き
くと、まだあれ が 生きて 居る だら
うか 足 の きず はどう したらう

かと思はないことはありません。

十九 ナゾ

私ドモ二人ハ色モナリモヨクニテ居マス。雪ノヤウニ白ウゴザイマスガ雪ノヤウニツメタクハナク又日ニテラサレテモトケマセン。シカシユヤ水ニハスグトケテシマヒマス。

一人ハタイソウ皆サンニスカレマス
が一人ハアマリスカレマセン。シカシ
二人トモ大セツナモノデドナタノ
ウチニモナカマノモノガ大テイ行
ツテ居マス。

私ドモハ何ト何デセウ。

二十 一本杉

私は道ばたの一本杉です。もう二

百年あまりもここに立つて居ます。
 東の村では「それもう日がくれる
 ぞ。一本杉のうしろへお日様がお
 はいりになつた」といひ西の村
 では「ああよいばんだ。一本杉のふ
 ところからお月様がお上りになつ
 た」などと申します。

私は長生をして居ますので、東の

死

火事

たり、こはれたり、火事が
 あつたり、水が出たりした



こと を みんな 見て 知つて 居ます。

私は 東の村の今 の 村長 さん
の おぢいさん や おばあさん を 其の
わかい 時 から 知つて 居ました。まこと
によく はたらく 人たち でした。せい
の 高い 私 の 目 にも、まだ お日様
が 見えない 中 から、くは や かまを
持つて たんぼ へ 行きました。又 私の

かた の 上 で、お星様 が 光りはじめると
ころ に なつて、小さな わらぶき の うち
へ かへつて 行きました。此の 人 たちの
田 や 岩 の 作り方 は ていねい でした
から、稻 も 麦 も よそ の より は
よく 出来ました。それで だんだん うち
が よく なりました。

今 の 村長 さん の おとうさん も お

金

となしい 人で、小さい 時から よくは
たらきました。西の村 一番の 金持
の むすめ さんが、此の人の所へ
およめ に 来ました。が、其の 時はな
かなか にぎやかな こと でした。

今 の 村長さん も 子ども の 時から
すなほ で、なきけぶかい 人 でした。あの
うち は 此の上 よくなる ばかり でせう。

間

此の 間 きびしい おさう式 が 私の
前を 通りました。それは 西の村で、
二番目の 金持だ といはれた うち に
生れた 人の でした。此の 人は 小さ
い 時 から いたづらもの で、大きく な
つても、うち の 仕事 も せず、あばつて
ばかり 居ました。それで とうとう 家も
土ざう も 田 も 島 も 人の 物 に

なつて しまひました。それ から どこへ
行つて 居た。か 村 にも ひきしく 居ま
せん でした。

間

かへつて 来た 時 には、ひどい みなり を
して 居ました。私 の 下 で、長い 間
しょんぼりと して 居まして、日 が くれ
て から 村 へはいりました。其の 後
間 も なく 死んだ の です。さむい 日

の こと で、あまり 気のどく でした。か
ら、私 が 風 の 音 を ごうつとさせ
て やりましたら、送つて 行く 人 が 「此の
人 も 一本杉 の 外 に ないて くれる も
の が なく なつた。」 と いひました。
私は 長い 間 に 子ども を たくさん
見ました ので、どう いふ 子 は どう
いふ 人 になると いふ こと を 見

ぬきます。學校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をころしたりするやうな子どもは、大ていろくなものになりません。

二十一 汽車のたび

軍時汽車

昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るにいきんの所へ出かけました。

河
てつけうへかかつた時、河を見たら、たいそう水が出て居ました。
「此のよいお天氣にどうしたのでせう。」

とたづねましたら、
「河上の方で雪がとけはじめたの
だらう。」
といふことでした。

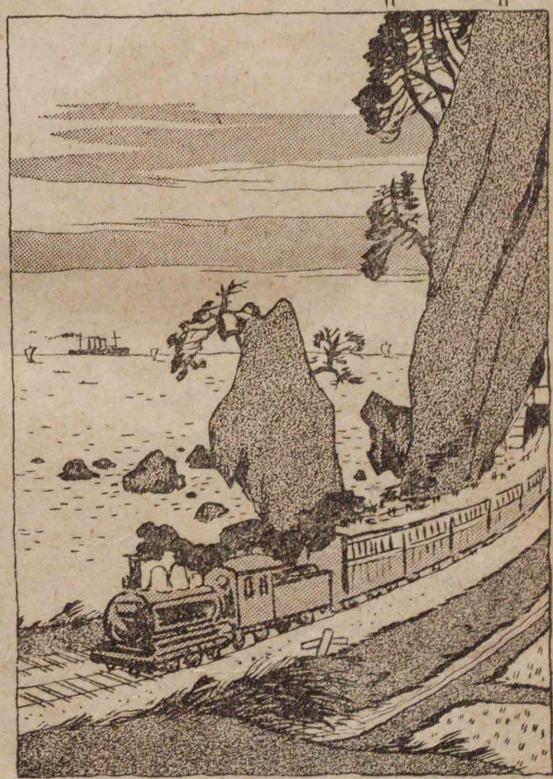
トンネルを出

て、海を見下

した時には、

いつ見ても
よいけしきだ

と思ひました。ちやうど大きな船がお
きを通つて居ました。ほばしらが二
本えんとつが四本の船です。そば



に乗つて居た人の話では、軍かん
だといふことでした。

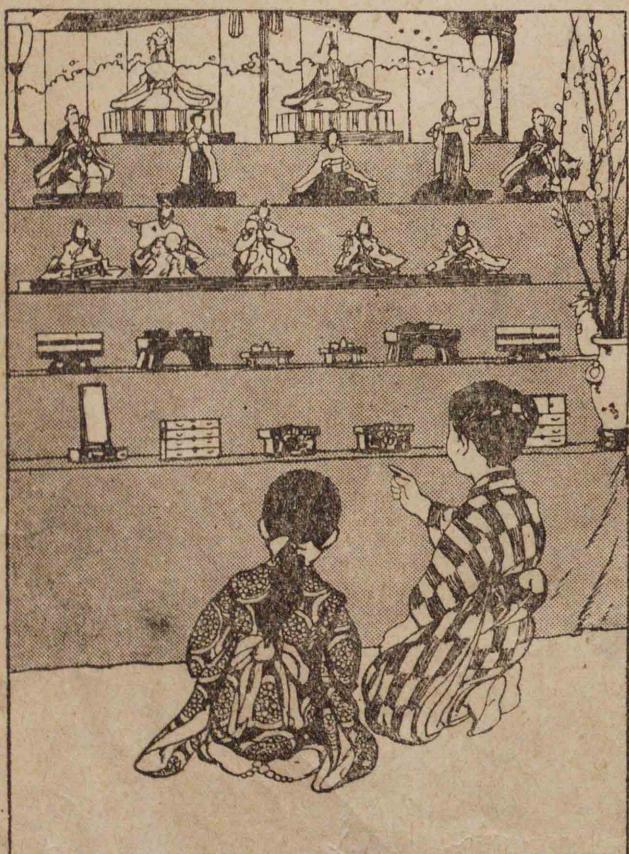
むかふのてい車場へ着いたら、にいさん
がむかへに来て居ました。

三人で町を見物しました。ひるのご
はんをたべてから、へいえいを見せ
てもらひ、弟へへいたいばうをおみ
やげに買って、夕方の汽車でかへ

りました。

二十二 ヒナマツリ

オ花ハオカアサンニオヒナ様ヲカ
ザツテイタダキマシタ。モモノ花ガ花
イケニサシテアリヒシモテモモウ
ソナヘテアリマス。今オキクトオヒナ
様ノ前ニスワツテナガメテ居マス。



オキクマアキレイデスコト。ダイリ様
ノ下ノダンニ弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ
何デセウ。オ花クワニンデヨノ

リヤウワキ ニ カザツテ アル ノ デセウ。
ズヰシン デス。ダイリ様 ノ ゴ家來
ダ サウ デス。

オキク「五人バヤシ」ノ 一番 右 ニ 居ル

人 ハ 何 ヲ スル ノ デセウ。

オ花「扇」ヲ 持ツテ 居ル 人 デス カ。ア
レハ ウタ ヲ ウタフ 人 ダ サウ デ
ス。

二人ガオ話ヲシテ居ル所へオ花
ノオカアサンガ來マシタ。

「バサン、今日ハ。」

「オキク サン デス カ。明日ハオセツク
デス カラ、學校ガヒケカラ、スグア
ソビニオ出デナサイ。オチヨサンモ
オ松サンモ來マス。
アリガタウゴザイマス。」

春

二十三 春が來た

春が來た、春が來た、

どこに來た。

山に來た、里に來た、

野にも來た。

花がさく、花がさく、

どこにさく。

山にさく、里にさく、

鳥が鳴く、鳥が鳴く、
野にもさく。

どこで鳴く、

山で鳴く、里で鳴く、

野でも鳴く。

二十四 曾我兄弟

曾我兄弟そがは兄そを十郎、弟わいを五郎と
いひました。十郎じゅうらうが五つ、五郎ごらうが三つ

兄弟

の年年に父はくどうすけつねにころされました。

母は泣きながら二人の子どもに、「何」といふくやしい事だらう。お前たちが大きくなつたら、此のかたきを取つておくれ。」

といひました。五郎はまだ小さくて、何も分りませんでした。が、十郎はなみ

だをおさへて、

「きつと此のかたきを取つて見せます。」

と答へました。

九つとなり、七つとなつたころからは、遊事にも、兄が弓をひけば、弟はたちをふりまはし、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。けれ

將

ども かたき の くどう は、みなもと の
よりも と いふ 大將 の お氣に入り で、
いつも 大せい の 家來 を つれて 居ます。
二人 の ものは なかなか そばへ よる
こと も 出來ません。くどう が 東 へ 行
けば、兄弟 も 東 へ 行き、西 へ 行け
ば、西 へ 行き、長い 間 つけねらひまし
た が 手 を 出す すき は ありません

でした。

引

ある 年、よりも は 日本中の さむらひ
を 引きつれて、ふじ の まきがり を い
たしました。かたき の くどう も よりとも
の おとも を して 行つて 居ます。兄弟
は 今度 こそ は と、母 に いとまごひ
して、ふじ の すそ野 へ 急ぎまし
た。

急

五月二十八日、雨のふるばんの事です。二人はたいまつで道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。

夜

今夜かぎりのいのちと思つて、

十郎「五郎、かほを見せよ。」

五郎「兄上。」

二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。

合

兄弟はくどうのやかたへふみこみました。ふみこんで見ると、くどうはよくね入つて居ます。ね入つて居るものを見るのはひけふと、

「おきよ、すけつね。曾我

兄弟がまゐつた。」



と名のりました。すけつねも人に
られたきむらひ、

「心えた。」

刀
二十
と、まくらもとの刀を取つておき上
らうとしました。二人はすかさずう
ち取つて、十郎は二十二、五郎は二十、
父がうたれてから十八年目にめで

たくのぞみをとげました。

をはり

大正六年十二月五日印行
大正六年十二月八日發行
大正七年九月廿五日翻刻印刷
大正八年六月廿五日翻刻發行

尋常小學國語讀本卷四
定價金九錢
太正四年度
臨時定價
金拾四錢

著作権所有

著作兼
發行者

文部省

翻刻發行
兼印刷者

大阪市南區難波芦原町千百八十六番地九
大阪書籍株式會社
代表者三木佐助

印刷所

大阪市南區難波芦原町千百八十八番地九
大阪書籍株式會社

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社

國定教科書共同販賣所

文庫
0
918
327

広島大学図書

2500032327

